



た「織部」

～ORIBE in N.Y.～



メトロポリタン美術館（正面景）

元屋敷窯跡などから出土した「織部」をはじめとする土岐市所蔵の代表的な「やきもの」が、アメリカのニューヨーク・メトロポリタン美術館で開催されている企画展『織部～転換期の日本美術～』（岐阜県美術館とメトロポリタン美術館共催、会期＝1月11日まで）で展示されています。

そこで今回は、展覧会の準備の様子（仕事の進め方の違い）や会期中の様子などを紹介するとともに、土岐市の「織部」が海を渡った意義を考えてみましょう。

企画展「織部」 「転換期の日本美術」 ニューヨークで開催中

昨年十月二十一日から一月十一日までの約三カ月間、アメリカ・ニューヨークにあるメトロポリタン美術館で、企画展「織部」転換期の日本美術」が開催されています。

この展覧会は、岐阜県美術館とメトロポリタン美術館との共同開催によるもので、十七世紀初頭に大流行した織部を、当時流行した茶道具だけでなく、時代背景や風俗などとともに多角的に紹介し、総合的に理解してもらおうというものです。

日本国内でも、織部を集めた展覧会は、過去に数回開催されたことがあります。が、今回のような試みは初めてのことで、それが、世界経済の中心地ニューヨーク、世界的な美術館であるメトロポリタンで行われたことに意義があります。

「織部」 ニューヨークに到着

（展覧会準備の様子から）
執筆：文化振興課
文化財係長 加藤真司

クレーンという仕事

今回の展覧会には、土岐市からは元屋敷窯や周辺の窯跡の発掘調査で出土した織部・黄瀬戸・瀬戸黒・志野の陶磁資料百九十八点のほか、美濃陶磁歴史館が収蔵する弥七田織部（弥七田窯跡出土）向付・青織部香炉をメトロポリタン美術館へ貸し出しました。

これらの陶磁資料が無事に輸送され、展示されたことを確認し、資料の取り扱いについての注意事項、例えば「この黄瀬戸鉢に掛けられた釉薬は、はがれやすいから注意してください」などと伝えるクレーンとして、資料の輸送に同行しました。

昨年十月六日、「織部」を載せた飛行機は、成田からニューヨークに向かって飛び立ちました。

約十二時間後、ジョン・F・

ケネディ空港に到着し、美術品輸送専門業者の方（もちろんアメリカ人）の出迎えを受けました。

彼の車で航空貨物専用大きな倉庫に向かい、そこで日本から空輸された、作品の入った木箱が大型トラックに積み込まれるのを確認します。そして、トラックの後ろについてメトロポリタン美術館に向かいました。



空輸され、到着した陶磁資料

メトロポリタン美術館

メトロポリタン美術館は、マンハッタンのやや北寄り、セントラルパークの東側にあります。パリのルーブル美術館、ロンドンの大英博物館、サンクトペテルブルグのエル

特集

海を渡っ



元屋敷窯跡の出土品

ミタージュ美術館と並ぶ世界四大美術館の一つです。ガイドブックによると、二百萬点以上のコレクションを所蔵し、世界各国から毎年五百四十万人以上の人々が訪れるそうです。館内は日本美術をはじめ、エジプト美術、ギリシャ・ローマ美術、ヨーロッパ絵画など二十の部門に分かれ、まるで各国の美術館が、この巨大な建物に集まったようです。急いで回っても、一日では見学しきれません。

美術館業務の分業性

欧米の美術館では、職員の分業化がかなり進んでいます。展覧会を企画して作品を選定し、図録の執筆などを行う学芸員のほか、作品が入られた木箱を開ける開梱作業員（パッカー）、作品の出し入れを管理する責任者（レジストラ）、作品を取り扱う作業員（テクニシャン）、作品の状態を点検する作品の保存責任者（コンサーバター）、会場のレイアウトを行うデザイナーなど、さまざまな職種

に分かれています。

日本の場合、開梱や作品の運搬など、一部の作業を美術品運搬会社をお願いするものの、ほかの作業は学芸員が行っているのと比較すると、まったくシステムが異なります。

欧米のシステムは、各仕事の専門性が確保されて合理的にみえますが、組織がうまく機能しないことがあります。

クーリエとして、土岐市からの資料に加え、京都市埋蔵文化財研究所から貸し出された資料、約四百点を点検しなければなりません。

ところが、丸一日たつて点検が終わったのは、たった七点ほどです。日本では、約二百点の資料の点検を一日で終えています。このペースでは、滞在期間中に仕事が終わりません。



開梱された「織部」



資料の状態を確認するコンサーバター

慣れない作品の状態を、丁寧にチェックしてもらってはいますが、これだけが遅れの原因ではありません。一つは作品の量に比してコンサーバターが一人しかいないこと、二つ目は、分業化が進むあまり、ある仕事の担当者が用事で抜けてしまうと、すべての仕事が止まってしまうこと、これが大きな原因です。

それならば、その人がいない時間、ほかの誰かがその仕事をすればよいのですが、なかなかそうはいきません。

実際、私たちが少しでも手伝おうとすると、「あなたたちがその仕事をすると、それを担当する人の仕事が無くなってしまふ」と言われてしまいます。よくいうとワークシェアリングなのですが…。

しかし、そんなことはいつ

ていられません。現実に時間がないのです。

翌日からはコンサーバターを増員していただき、同時に私たちが作品を運んだり、仮収蔵したりして手伝うことも黙認していただきました。

逆に、分業性の優れた場面にも遭遇しました。

元屋敷窯跡などから出土した陶磁資料を並べるケースが深かったため、なるべく近くでやきものが見えるように仕様の変更を要望したところ、早速デザイナーに伝えていただき、二日後には完成させてくれました。



仮収蔵された「織部」



「織部」はニューヨーク
で市民権を得たか？

(展示会の様子や内容など)
執筆！美濃歴史館室長 林 順一
美濃歴史館係長 林 順一

日本とアメリカの織部の名品が集合

展示会の概要をご案内します。会場は、二階奥の日本ギヤラリーです。展示室への少し長い通路があり、両側はシンプルな格子で飾られて、日本的な落ち着いた雰囲気を出しています。奥の正面には、メトロポリタン所蔵の伊賀水指が象徴的に展示されています。会期中には、作品保護のために入れ替えが行われ、後半には、重要文化財の伊賀水指銘破袋（水指の破れた袋）が展示されます。この破袋は、古田織部が使った茶道具ではありませんが、彼の推薦状が添えられ、彼の好みを伝える数少ない作品として有名です。

アメリカには、織部をはじめ、数多くの桃山陶器が収集されています。有名なものが、明治時代に来日したエドワード・モースの数千点にも及び

日本陶磁器のコレクションで、その中からも出展されています。ほかに、百年以上前からのコレクションがいくつもあり、美術品に対するアメリカ人の情熱と理解をうかがうことができます。

元屋敷窯跡出土の陶片

織部誕生直前のやきものを紹介しているコーナーでは、古田織部の師匠・千利休が好んだ茶碗や、黄瀬戸・志野の茶碗・鉢を紹介することで、織部との対比を示しています。このコーナーの最後に、土岐市から貸し出した元屋敷窯跡出土の織部・黄瀬戸・瀬戸黒・志野といった多彩な陶片約二百点が、一・二m×一・八mほどのケースに、びっしりと展示されています。



展示された「織部」陶片

その対面には、京都のやきもの問屋と思われる遺跡から出土した、大量に廃棄された志野や織部の陶片が並べられています。この対比によって、生産地・美濃出土の陶片と大消費地・京都出土の陶片が同じ意匠をもっていること、生産地・美濃の製品が直接的かつ大量に運ばれていたことが分かります。

屏風絵・漆器・着物にみる
流行と風俗

桃山時代をめぐる世界は、新大陸の発見や世界一周の成功など、世界規模で活動が活発になってきた時代です。香料や絹、陶磁器、お茶などの特産物を求めて、西洋から東洋へ貿易船が頻繁に行きかい、日本にも来航しました。宣教師による熱心な布教活動も行われました。この貿易や商人、宣教師などの人々の様子を描いたものが南蛮屏風です。世界地図を描いた屏風もあります。このような異国趣味は、流行の風俗として取り上げられたもので、屏風のほかに、蒔絵（まきゑ）の手箱などの調

度品に文様として取り込まれています。織部のやきものにも、南蛮人燭台（しゆくたい）や、十字架風の文様のものが残されていますが、同じように当時の流行として意匠に取り入れられたものです。



展示会の様子（中央右手は、洛中洛外図屏風です。この展示ケースは、屏風や掛軸が見やすいように、ガラスがはめ込まれておらず、直接見ることができます。しかし、手を出すとセンサーが感知して、警告音が出るしくみになっています。）

当時流行した娯楽の一つに、花見があります。野山に出て酒宴を設けている様子を描いた屏風絵の中には、生き生きとした人物が描かれています。ほかに、辻が花染めの着物を着た人物を描いた屏風絵から、当時の衣装や風俗をうかがうことができます。そして、

衣紋掛けに掛けられた流行の着物（きもの）を描いた屏風は、さながらファッション雑誌がポスターのようです。辻が花染めの意匠は、織部の意匠とよく似ていることで知られています。漆工芸にも、流行の趣向が表れています。器を大胆に斜めに分割し、一方には花鳥風月を描き、もう一方を異なる絵柄で埋めている意匠は、高台寺蒔絵（こうたいじまきゑ）といわれるものです。織部に見られる釉薬を掛け分ける意匠と極めてよく似ています。

織部に関する資料

この展覧会では、古田織部の人物については、書状、京都堀川の織部屋敷跡から出土した織部のやきもの、織部の菩提寺である興聖寺所蔵の織部画像にとどまっています。それゆえ、織部のやきものを中心に、時代の背景や風俗、趣味、流行を、絵画資料や調度類の絵柄や意匠から幅広く取り上げて示しています。

展覧会開催のために、日本から多くの美術品を持っていただきました。土岐市からは、先に紹介しました資料を貸し出しています。当時の陶器生産地として、日本地図に土岐市の位置を示せたことも大きな成果といえるでしょう。



展示風景（右手の香炉は土岐市所蔵）

ワークショップ報告



展示風景（中央の花生と中央奥の向付5客は土岐市所蔵）

十月二十七日に、ワークショップが行われ、竹内順一東京芸術大学美術館長や、東京国立博物館の伊藤嘉章氏（土岐市出身）とともに講師を勤めました。ワークショップとは、耳慣れない言葉ですが研究集会のことで、メトロポリタン美術館の学芸員や、アメリカの他の美術館・博物館の日本美術研究家に加えて、美術商やコレクターなど約二十人が参加しました。

ワークショップでは、メトロポリタン美術館所蔵の茶入約六十点の中から、あらかじめ選んだ二十二点を材料にし

ました。中国、美濃、瀬戸、九州の高取や薩摩などの生産地を見分けるための鑑定的な基礎知識を身に付けてもらうとするものでした。茶入の見方、ロクロや糸切りの回転方向など、事前に用意しておいた粘土や、ニューヨークで作った即席のロクロを持ち込んでの実験を交えながら、総合的に分かりやすく紹介できたとと思います。

このような鑑定知識講座は、日本では資料が少ないために一つの博物館で行うことは難しく、今回の試みは世界初のことです。参加者たちの熱心なこもった質問も多く、極めて有意義なものでした。



ワークショップの様子

この展覧会の意義と評価

今回の展覧会では、展示初日（十月二十一日）に先立って、報道関係者を集めた内覧会を前日午前十時から実施し、百人以上が集まりました。また、同日午後六時から開催の関係者を集めた内覧会とレセプションには、三百人が招待されました。この多くは現地記者や現地関係者でしたが、集まった多くのニューヨークカ

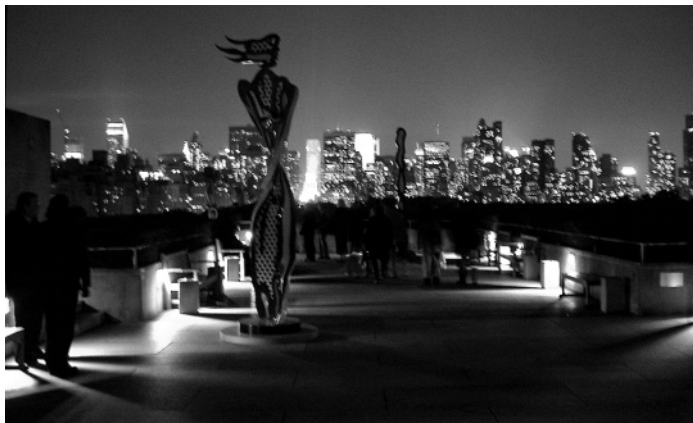
ーたちに「織部」は受け入れられたのではないでしょう。十月二十四日付ニューヨークタイムズ紙では、ウィークエンド美術特集の表紙カラーで「織部」のことが紹介されました。

また、十月二十六日には展覧会のシンポジウムが開催され、二百人を超える参加者がありました。そして、その発表については、非常に分かりやすかったと評判でした。

今回のように、アメ

リカで「織部」が一堂に会したことは初めてのことで、日本にある名品は、所蔵している美術館に足を運んでも見られる機会は少なく、ましてや名品が揃う機会はほとんどありません。これだけの規模と内容の作品を、海外で見ることができたのは、皮肉なところかもしれません。

いずれにしても、「織部」は、ニューヨークで「市民権」を得たといえるのではないでしょう。



メトロポリタン美術館の屋上から見たニューヨークの夜景